

ヨーロッパにおける極右とポピュリズム

その他のタイトル	L'extreme droite et les populismes en Europe
著者	ペリノー パスカル, 土倉 莞爾, 大久保 朝憲
雑誌名	ノモス = Nomos
巻	17
ページ	9-17
発行年	2005-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/12653

ヨーロッパにおける極右とポピュリズム

パスカル・ペリノー *

土倉 莞爾 **

大久保朝憲 共訳 ***

1 はじめに

ヨーロッパの多数の国において、昨今の国民議会選挙と大統領選挙では、ポピュリスト政党、ナショナリスト政党、さらに時には極右政党の躍動が目立ち、これらの政党は、3つの国で政権をとることになった（この3国とは、ウォルフガング・シュッセル Wolfgang Schäuble率いるオーストリア人民党ÖVP政権と手を結んだイェルク・ハイダー Jorg Haiderの自由党FPÖのオーストリア、シルビオ・ベルルスコーニ Silvio Berlusconi率いる政権に、ウンベルト・ボッシ Umberto Bossiの北部同盟が国民同盟 Alliance nationale およびフォルツァ・イタリア Forza Italia と連立しているイタリア、そして、ヤン・ペーター・バルケネンデ Jan Peter Balkenende 政権下で、ピム・フォルタイン党 Liste Pim Fortuyn が、キリスト教民主同盟 CDA および自由民主国民党 VVD と連携したオランダのことである）。選挙戦におけるこうした勢力の台頭は、以下の地域で顕著である。オーストリア（1999年にFPÖに26.9%に票が集まったが、2002年に極右政党が10%しか得票しなかったために大きく後退した）、ベルギー（2003年に、フラームス・ブロック Vlaams Blok が11.6%、ベルギーFNが2%を得票した）、デンマーク（2001年に、デンマーク人民党 Dansk Folkeparti が12%、進歩党 Parti du Progrès が0.6%を得票した）、フランス（2002年4月の大統領選挙で、ジャン・マリ・ルペン Jean Marie Le Pen に16.9%、ブリュノ・メグレ Bruno Mégret に2.3%の票が集まり、6月の国民議会選挙では、国民戦線 FN が11.3%、国民共和運動 MN R が1.1%を得票した）、そしてオランダ（2002年にピム・フォルタイン党 LPF が17%、続いて2003年に大幅に衰退し、5.7%まで下がった）である。これらEU諸国とは別に、同様の動きが、ノルウェーでも記録されている。ノルウェーでは、カール・ハーゲン Carl Hagen の進歩党が2001

編集部注* Pascal Perineau パリ国立政治学院フランス政治研究所所長・教授 本稿は、2004年10月14日開催法学研究所第34回シンポジウムの報告原稿を翻訳したものである。

L'extrême droite et les populismes en Europe

Professeur Pascal PERRINEAU, Directeur du Centre de Recherches Politiques de Sciences Po (CEVIPOF, Paris)

UNIVERSITE DE KANSAI, OSAKA 14 Octobre 2004

** 関西大学法学部教授

*** 関西大学文学部助教授

年の国民議会選挙で14.7%を得票し、スイスでは、クリストフ・ブロシェCristoph Blocherのスイス国民党UDC-SVPが1999年の国民議会選挙で22.5%、そして2003年に26.6%を得票し、スイスの第一党となった。このように、ナショナル・ポピュリズムがそこかしこで頭角を現わしていることは明らかである。¹⁾ しかしながら、ヨーロッパの国々の中には、この潮流の影響を免れ、極右が周縁にとどまっているところもある（スペイン、ドイツ、フィンランド、アイルランド、スウェーデン）。直近の2004年6月のEU議会選挙では、極右は、以下の地域で目立った成績をあげた。ベルギー（フラームス・ブロック14.3%、ワロンFN3.2%）、フランス（10.1%）、イタリア（4リストの合計7%）、デンマーク（人民党DF6.8%）そしてオーストリア（6.3%）といった国々である。それ以外はいずれの地域でも極右は5%以下にとどまっている。

2 さまざまな極右勢力

ポピュリズムとナショナリズムのメッセージを押し出し続けるこれらの極右勢力には、さまざまなものがある。イタリアのウンベルト・ボッシ、フランスのジャン・マリ・ルペン、オランダのピム・フォルタイン、あるいはまたノルウェーのカール・ハーゲンその他、極右の指導者たちが、すべて同じ政治的信条を共有しているわけでも、同じ出発点を持っているわけでもない。ボッシの北部同盟は、（ロンバルディア地方の）裕福な近郊部の政治的捌け口であり、ローマ中心主義や、南部Mezzogiornoにたいする寛容すぎる政策に反対してきた。ジャン・マリ・ルペンは、収縮と排除のナショナリズム、そして道徳面や権威の価値付けへの郷愁につけこむが、これは、ピム・フォルタインが創設したLPFの方針とはほとんど関係ない。フォルタインはみずからが同性愛者であることを公表し、オランダの文化的な自由主義と、きわめて相性よくやっていた。反共産主義は、しばしばヨーロッパの極右の繰り言のようなものだったが、旧東ドイツでは、ドイツの主たる極右勢力のひとつであるドイツ国家民主党NPDが、「ドイツ民主共和国」の共産主義旧体制に美点を見出し、「東ドイツこそよりよいドイツだった」と主張している。そして、カール・ハーゲンの進歩党FRPは、スカンジナビアの多くの進歩党と同様に、北欧諸国における福祉国家政策の肥大への反動からうまれた勢力で、他方、その他の指導者たちは、「国家社会主義 socialisme national」を賛美している。

これらすべての勢力は、それぞれさまざまに、その多様性をもっともよく示すものの一つとして、これらの勢力がヨーロッパという次元で共存しようとする際の困難をあげることができる。ストラスブールのEU議会では、ここ3期にわたって極右勢力のヨーロッパ団体はなくなっている。1984年、ジャン・マリ・ルペンは、FNとイタリアのMSI周辺で組織された小グループ（ヨ

1) この「ナショナル・ポピュリズム national-populisme」という概念については、ピエール・アンドレ・タギエフPierre-André Taguieffを参照できるだろう。彼によれば、政治的な決まり文句の型で、人民は「エトノス ethnos」（「純粋な pure」民族国家 la nation ethnique に対応）であると同時に「デモス démos」（墮落していないと想定された下の人々）とみなされる。Cf. PA. Taguieff, dir., *Le retour du populisme*, Paris, Ed. Universalis, 2004.

ヨーロッパ右翼グループ)を送り込むことに成功していた。1989年に、彼は同じ試みを繰り返したが、この時はMSIと分離した。これは、MSIが、アルトアディジェ Alto Adige (人口100万人程度のイタリア北部の地方。1919年のサンジェルマン条約の結果としてオーストリアから分割された)問題でドイツ共和党と対立したことによる。ルペンは、10名のFN議員、6名のドイツ共和党员、そして1名のフラムス・ブロック議員をふくむグループを主宰した。1994年以来、極右は一つのグループを作ることができず、現在、EU議会では複数のグループに分裂している。まず、「主権主義者 souverainistes」たちによる諸国民のヨーロッパ・グループ、ここにはデンマーク人民党の議員が1名入っている。次に「主権主義者」たちが集まった独立と民主主義のグループで、ここには北部同盟議員が4名と、LAOSというギリシアの過激主義の議員が1名いる。そして今一つは無所属議員たちのグループで、ここには、とりわけ7名のFN、3名のフラムス・ブロック、2名のイタリア・ネオ・ファシスト議員(社会運動・炎の三色旗MSI-FTと社会オールドナティヴAS)、1名の北アイルランドのユニオニストの議員(民主ユニオニスト党DUP)、そして、オーストリア自由党の議員の1名が含まれている。ナショナリストたちは、このように分裂しており、国際的に団結することは果てしなく困難なこととなっているが、それでもいくつかの共通の特徴がある。²⁾

3 いくつかの共通点

雑多で、時にいささかあいまいな理論上の準拠とは関係なく、また政治的道筋が多様であるにもかかわらず、これらさまざまな極右勢力は、カリスマ的なリーダーの権威の下に中央集権化した政党機能、ポピュリスト的民衆扇動へのたびたびの訴え、最後に、政治的立論において決まっていたいくつかのテーマが中心となり始終それらが繰り返されるということで性格づけられる。そういうテーマの中でよく見受けられるものの一つは、極度な外国人嫌悪で、これはしばしば「反移民」というテーマになる。他には、「法と秩序」の分野でとくにはっきりと主張される強権的な側面、80年代の新自由主義と90年代の保護主義を組み合わせたような雑多な経済計画、最後に、「上からやってきたエリートたち」を告発する「反システム」の語り口をやたら使うことなどである。もちろん、これらのテーマは、民主主義とつながりの薄い政治勢力によって別の時代にも使用されてきたものでもある。しかしながら、[これらを]戦間期のファシズムと直接的かつ全般的に同一視することはあいまいで、間違っているとさえ言えるかもしれない。20年代30年代のファシスト政党は、きわめて深刻な経済的・社会的という文脈のなかで生まれた。この危機とは、1929年の世界恐慌のことであるが、今日これと同じほどの危機に見舞われることはない。かつてのファシスト政党はまた、第一次大戦によって生じたフラストレーションのお陰で発展できた

2) この点については、以下が大変有益な参照文献となる。Jocelyn A.J. Evans et Gilles Ivaldi, Les dynamiques électorales de l'extrême droite européenne, *Revue Politique et Parlementaire*, n° 1019, mai-juin/juillet-août 2002, pp. 67-83.

言うこともできる。すなわち、ドイツにおける敗北し恥辱を受けた者のフラストレーション、イタリアの無視された勝利者としてのフラストレーションのことである。今日では、経済的・社会的貧困も、長期的で凄惨な紛争の心理的外傷も、ヨーロッパの問題になってはいない。往時のファシスト政党はまた、全体主義政党でもあり、ただ一つの政党が社会全体を支配し、上から下への組織化を行なおうとするものだった。オーストリアのFPÖも、フランスのFNも、ドイツ共和党も、オランダのLPFも、あるいはイタリアの北部同盟も、多元的デモクラシーを、そのような体制にしようと言っているわけではない。戦間期の諸政党は、「指導者原理Führerprinzip」あるいは「ドゥーチェ崇拜」を実行したが、現在のナショナリスト・ポピュリスト政党指導者の中心的役割は、それにはほど遠い。そして最後に、現在のいかなる勢力も、ナチやファシストがそうしていたように、国家が経済に大幅に介入することを進めるわけでもなく、社会をコーポラティズム的組織にすることもない。今日の現実には、過日の眼鏡で見ることはできない。何故なら、そのようにすることで、今日の極右を特徴づける現代的な要素を掴み損ねてしまう危険があるからである。系統的関連性にばかり焦点をあてると、新しい政治現象の広がりや独自性に目をとめずにそのまま脇を通りぬけてしまうかもしれない。そもそも、ヨーロッパでまだ生存しているファシストなど年老いた極右の人たちに、まったく生気がないというのは興味深いことである。たいていの場合は死に絶えたフランコ主義へのノスタルジーに引っかかったにすぎないスペインの極右（直近の2004年6月のEU議会選挙では極右4リストでわずか0.17%）も、ムツソリーニ・ファシズムの後継者であるイタリアのネオ・ファシストたち（直近のEU議会選挙でのネオ・ファシスト3政党で2.08%）も、[パパドプロス]大佐の時代を忘れられないギリシアの極右（直近のEU議会選挙での懐古的極右2リストで0.42%）も、サラザール主義の記憶にしがみついたポルトガルの極右（EU議会選挙で改革国民党Partido Nacional Renovadorは0.24%の得票率）も、選挙において大きな反響を得ることはない。これらの極右勢力は、いずれも選挙では周辺部に沈んでいる。これに対して、これら古い勢力から多少とも遠く離れた後継者たちは、現代の諸問題を掴んで、めざましい成功をおさめている。オーストリアのFPÖ、フランスのFN、デンマークのデンマーク人民党、ノルウェーの進歩党、あるいはオランダのLPFなどは、いずれも10%の水準を大きく超えて、オーストリアにいたっては、20%の得票率となっている。

4 現代の不安

1930年に、ジグムント・フロイトは、「文化への不安le malaise dans la culture」³⁾が、いかにして、ヨーロッパにおける死のイデオロギーの集団的爆発のもとになっているのかということを見事に示した。ヨーロッパ文化は、あらゆる文化がそうであるように、抑えられた欲動の上に築

3) Sigmund Freud, *Le malaise dans la culture*, Paris, Coll. Quadrige, PUF, 1995 (1^{ère} édition en allemand : Vienne, Internationaler Psychoanalytischer Verlag, 1930). (翻訳:「文化への不満」, 浜川祥枝訳, 『フロイト著作集』第3巻)

かれ、フロイトにとっては、奥深い不満にとらえられて、真の「攻撃欲動」ひいては死の欲動の開花を妨げることがもはやできないもののように思われた。それから70年以上たった今も、この精神分析の父の分析は有効であり続けている。しかし、この精神分析学的説明に加えて、われわれの生きる現代の奥深い不安感に根を降ろした社会学的な説明をつけ加えなければならない。この説明は、経済的、社会文化的、そして政治的な側面を持ったものである。

経済的には、産業資本主義を構成する各側面は消失し、ポスト産業型の資本主義に場所を譲ることになった。われわれの経済全体において、産業社会の衰退は、サービス経済の爆発、労働市場の破綻、熟練を要せず、不安定で、周縁的な仕事が「下の人々 gens d'en bas」に帰属するようになった「二元的社会 société duale」の出現といったことを導いた。この下の人々にとって二元的社会は産業社会において意味を持っていたものが消滅するという形で現れた。国家の強い規制のもとでの産業資本主義は、均質な階級社会を作り出して、それは社会的ミリュー（労働者階級、農民、ブルジョア）、イデオロギー（右翼、左翼）、政治グループ familles politiques（共産党、社会民主主義、キリスト教民主主義、保守ブロック）への永続的帰属感を生み出していた。しっかりとした安堵感を再生産していたこの世界は死んだ。例えば、フランスの場合、左翼、右翼という二つの世界、一方は共産党と「共産主義的反社会」周辺に形成され、他方はカトリック教会とその団体組織を中心に形成されたものだが、この2つの世界は、ともに消滅してしまい、あとには巨大な喪失感が残った。死に絶えた古い世界の瓦礫の上に、あらゆる種類の不安や郷愁が花開いた。フランスのルペン、オーストリアのイエルク・ハイダー、ベルギーのフィリップ・ドウィンター Filip Dewinterらは、こうした不安や郷愁を見つけだし、引き受けて、選挙にその捌け口を見出させようとした。このような反響は、産業資本主義の発展に中心的な役割を果たした労働者集団においてとくに強まっている。90年代初頭以来、それまでは社会民主主義や共産主義といった左翼の勢力下だった労働者の世界において、極右勢力の選挙における急騰が、ヨーロッパでは一般的なものになった。FN、ノルウェーの進歩党 FRP、フランドレンのフラームス・ブロック、ドイツの極右（共和党、ドイツ国民連合 DVU、NPD）、オーストリアの FPÖ などはいずれも、選挙民の目立ったプロレタリア化を経験した。このようにして、産業資本主義の切断によって生み出された不安感によって、ヨーロッパの極右に、もともとの支持母体としてもっと少数だったプチブル出身の支持層（職人、商人、小企業家、独立労働者）を補強する形で、労働者の支持層がもたらされたというわけである。こうした「商店と工場の同盟」は、ヨーロッパの極右が選挙に勝つための常套手段の中心となっている。ヨーロッパ極右勢力は、90年代のあいだに、政策やイデオロギー傾向を修正して、この2種類の顧客層に訴えるということが出来るようになった。労働者階級は、国民資本主義、福祉産業資本主義に郷愁を感じ、よりいっそう超国家的で、自由主義かつ個人主義的なポスト産業資本主義に脅かされているので、極右政党は、多くの場合保護者として、富の再分配、不平等の削減に参加し、同国人のみに福祉国家のメカニズムを割り当てるといった提案をする。このような「福祉国家の排外主義 chauvinisme de l'Etat Providence」は、労働市場で外国人労働者との競合により、また福祉国家の資源の減少によって、その地位を揺るがされている労働者層にしばしば大きな反響を呼ぶ。独立のプチブルにたいしては、極右は、よ

り古典的な仕方で、王権的機能 *fonctions régaliennes* に再集権化した「法と秩序」を保有する国家、そしてしばしば民衆扇動者的な反租税主義を強調した政策を打ち出している。

社会的、文化的面では、現代はいわゆる「開かれた社会 *société ouverte*」⁴⁾ と呼ばれるものを何よりも日増しに明確に具体化している。開放 *ouverture* とは、ヨーロッパのすべての社会、さらにはより広い社会にかかわることで、経済・金融面でのグローバリゼーションに結びついた経済的な開放のことであり、ヨーロッパ建設、国際関係面での国家間の超国家的発展に伴う政治的な開放のことであり、さらには、文化・社会的な開放として、移民の流れが強まり、人々の移動がどんどん盛んになっていること、そしてわれわれの社会がますます複合文化的になって来ていることでもある。こうした三重の開放を前に、二種類の反応が起きている。上流・中流階級出身の多くの人々は、これらの開放が単に肯定的なものであるとしか感じていないか、いずれは自分たちがその恩恵を被ることになるだろうと考えている。これに対して、教育レベルが低く、社会階層の下の方に位置する多くの人々は、昨今の変化を理解するために、いろいろなものを読んだりすることも出来ないの、前の世代の、安定した、比較的閉鎖的な社会という、これまで基準としてきた世界が崩れて行くことに心配を持って見守っている。そのようにして彼らは、現代の極右の指導者たちによる「閉ざされた社会 *société fermée*」の聖歌隊の背後に進んで寄り集まって来る。極右の指導者たちは、このような不安感や心配を利用することを誰よりもよく知っている。たとえば、FPÖのイェルク・ハイダーは、ハンガリー人、スロベニア人、チェコ人を「侵略者」として攻撃している。ルベンは「ヨーロッパ世界連邦主義」や「コスモポリタニズム」を告発し、ヨーロッパやユーロ世界からの離脱を主張している。またデンマーク人民党党首のピア・キエスゴー Pia Kjaersgaard は、「これまでも、そしてこれからも移民国家ではなく、そうあってはならない」デンマークの等質性を讃えている。これらのリーダーたちは、次の点で一致している。つまり、開かれた社会の「害 *méfais*」をどう見ているかという点、そしてその過程を停めて、いままで以上に「閉ざされた」あるいは自給自足的な社会への後退する必要があると考えている点である。このようにして、ヨーロッパの多くの国で、古典的な左翼／右翼という亀裂 *clivage* とはあまり関係のない新たな亀裂が現われて来た。それは1992年、マーストリヒト条約の承認に関する国民投票時のフランスで最初に現われ、選挙民をほぼ拮抗する2つの勢力に分断した。この亀裂は、一方で、グローバリゼーションやヨーロッパ建設、複合文化的な社会に適応した人々、他方で、国境に鍵をかけ、多少とも「閉ざされた」社会のモデルを推奨することで、このような変化から免れるだろうと信じる人々を対立させることになった。極右は、「閉鎖のナショナリズム *nationalisme de fermeture*」という長い伝統をもってすれば、われわれ現代の社会・文化における本質的な不安感を利用するのに、自分たちが他の党派よりもきわめて有利な位置に立てることをよくわかっていたのである。東ヨーロッパで、EUへの加盟候補国を見ても、同様の現象が観察される。そこには、一方で「ヨーロッパ」は大きな夢の実現で、民主的な共同体への決定的

4) この点については、以下を参照のこと。Pascal Perrineau, dir., *Les croisés de la société fermée, L'Europe des extrêmes droites*, Editions de l'Aube, 2001.

な組み入れであるとする人たち、他方で国家共産主義national-communismeに郷愁を抱き、進んでウルトラ・ナショナリストの網にかかろうとする人々との亀裂がある。そのようなウルトラ・ナショナリストとは、ルーマニアのコルヌリユ・テュドールCorneliu Tudor（彼の政党である大ルーマニア党PRMは、2000年の国民議会議員選挙で19.5%を得票）、ポーランドのアンジェイ・レツペルAndrzej Lepper（その農民かつポピュリスト運動によって、2004年6月のEU議会選挙で10.78%を得票、カトリック系極右運動のポーランド家族連盟LPRは15.9%を得票）などである。

最後に、極右に活力をあたえている現代の危機の最後の要因である民主主義的不安malaise démocratiqueについて。宗教をめぐる明晰な政治史の中で、マルセル・ゴーシェは「世界の脱幻想化désenchantement du monde」⁵⁾が、いかに、宗教の領域のみならず、より包括的に、変転する集団のあるべき姿と結局政治イデオロギーを説明する代表制すべてに及ぶものであったかを示した。変転を知ると同時に制御することを要求する代表制のこのような崩壊で、政治目標は失われ、政治代表の由々しき危機が訪れた。このような危機は、ヨーロッパ全体を覆うものであるが、中には、さらに深い不安を味わっている国々もある。それは、それらの国では、政治代表が、社会を貫く亀裂の多様性や新しさ、そして複雑さを表示することが出来ないという事実によるものである。⁶⁾ 政治紛争が意味を失い、ときに左翼も右翼も要するに同じようなことを言っているような印象をあたえ、主要な政党がほぼ制度化した同意にもとづいて権力の残骸をわけあっているような政治システムにおいては、このような不安は絶頂に達しているように思われる。このようなシステムは往々にして非常に深く進行し、A・レイプハルトが「多極共存型民主主義démocratie consociative」⁷⁾とよぶ形式で制度化された。「コンセンサス・デモクラシーdémocratie de consensus」が真にシステム化した国々、たとえばオーストリアの「陣営Proporz」、スイスの「位相concordance」、ベルギーとオランダの「柱状pilarisation」(Verzuiling)と政党民主主義partitocratieなどがそうなのであるが、そうした国々では、極右および／もしくはポピュリストが、現状への不満や反論を回収するためのスペースを持っている。市民が「社会は変化するけれど、権力の配分システムやエリートたちはそのままだ」と言う時、これに抗議し、立場を

5) Marcel Gauchet, *Le désenchantement du monde, Une histoire politique de la religion*, Paris, NRF, Gallimard, 1985.

6) 『世界の幻滅』の中でマルセル・ゴーシェ Marcel Gauchetが書いているように、政治的関係の軸となる形式としての紛争は、「すくなくとも仮想の上だけでも、敵対関係が集団全体におよび、それが市民の不調和に根をおろすものであり、政治の場面で、それが、個人間もしくは集団間にむすばれた諸関係の動きそのものにする不和、もしくは不和の束を表現しているものであることを要求する」(p.282, op.cit.).

7) オランダの政治システムについての研究をもとに、アレント・レイプハルト Arend Lijphartはこの「多極共存型民主主義」という概念を作成した。これは、政治的エリートのカルテルによる政府が、分断された政治文化における民主主義を安定した民主主義に変えようとするものである。オランダやベルギー、オーストリアやスイスは、しばしばこのモデルのもっとも忠実な具現であるとみなされてきた。Cf. Arend Lijphart, Julian Thomas Hottinger, *Les démocraties consociatives*, Revue internationale de politique comparée, vol.4, n° 3, 1997, pp.529-697.

露にするポピュリストたちだけが真の反対者となる。フランスでは、この「コンセンサス・デモクラシー」の墮落した形であるコアピタシオン（保革共存）⁸⁾という現象があったが、これは同様の効果を生み出し、2002年の大統領選挙の第二回投票で、「システム」や「エスタブリッシュメント l'Etablissement」に徹底的に対立する者の先駆けとして、ジャン・マリ・ルベンのような人物を押し出すことになってしまった。これら「システム外」の政治勢力は、このようにして記録的な成績をあげることに成功するが、他方でシステムを組み入れたとたんに再び落ち込んでしまう。たとえば、オーストリアのFPÖが2000年2月に、保守系のÖVPと連立して政権に入って以来のことなどがそれにあたる。これにたいして、「コンセンサス・デモクラシー」のモデルを避けることが出来た国では、極右の様々な企てのために空いてしまった空間はごくわずかなものである。というのも、そこには左翼と右翼の大政党の真の交替があり、そこでは一つの右翼政党が右翼諸派の占めるあらゆる空間を支配し、移民や安全保障の問題を極右に残しておくことをしないからである。かつては英国のマーガレット・サッチャーの保守党、あるいはスペインのホセ・マリア・アスナル José Maria Aznar の人民党、今日ではドイツのエドムンド・シュトイバー Edmund Stoiber のキリスト教民主同盟／キリスト教社会同盟 CDU-CSU は、不法移民の分野、「法と秩序」の分野での放任主義、あるいは右翼と左翼の政治的支離滅裂を、極右から引き抜くことができるということをよくわかっていた。

ヨーロッパにおける極右の上昇は避けられない現象ではない。たしかに、政治が脱神聖化され、脱幻想化させられる時代にあって、数十年前に政治空間を活気づけた革命的、あるいは超反動的な古い情熱への郷愁を抱いている人々はいる。しかし、最近マルセル・ゴーシェが喚起していたように、⁹⁾「政治の魅惑は20世紀の悪夢」であった。あちこちでの極右や極左の復活は、多くの場合、具合の悪い幻滅と、「魔力が解けた *désenchantée*」、「質素である *modeste*」のみならず、とりわけ現代的な政治というものを受け容れることの難しさへの、こだま *écho* にすぎない。

訳者あとがき

ここに訳出したのは、2004年10月14日に開催された、関西大学法学研究所主催、東京大学法学部・政治系COE、東京大学比較法政国際センター共催による、第34回シンポジウム『現代民主主義のゆくえ — ヨーロッパから考える —』において、パリ国立政治学院フランス政治研究所長・教授パスカル・ペリノー氏が行なった講演のオリジナル原稿である。ペリノー教授の口調は明晰なフランス語で、声もよく通り、うっとりとするような素晴らしい講演であるが、原稿も簡潔、適確な名文で、うまく日本語に訳せたかどうか自信がないのであるが、御覧いただけたら幸いである。このオリジナル原稿（フランス語）は関西大学法学部『欧文紀要』26号に掲載されている。

8) 左翼の大統領と右翼の内閣のコアピタシオンは1986年-1988年、1993年-1995年の間持続した。1997年-2002年、コアピタシオンは右翼の大統領と左翼の内閣の間に存在した。このようにして20年間の間、フランスは行政府と立法府が同じ政治の色合いをもった制度とは別のコアピタシオンというシステムを経験した。

9) Marcel Gauchet, *Le double refus du religieux et du politique, entretien, Le Figaro, 29 juillet 2002, p.23.*

Cf. *KANSAI UNIVERSITY REVIEW of LAW and POLITICS*, No.26, March 2005, pp.37-44.

ここでペリノー教授は、現代ヨーロッパにおける極右とポピュリズムについて論じている。ペリノー教授によれば、現在のヨーロッパの多数の諸国においてポピュリスト政党、ナショナリスト政党、極右政党の進出が顕著になっている。ポピュリズムとナショナリズムを押し出すこれらの極右政党にはさまざまなものがある。1994年以来、極右はヨーロッパ規模の一つのグループを作ることはできず、EU議会では複数のグループに分裂している。

さて、ヨーロッパの多くの国で古典的な左翼／右翼という亀裂 *clivage* とはあまり関係のない亀裂が現れてきた。この亀裂は、一方でグローバリゼーションやヨーロッパ統合、複合文化的な、「開かれた社会」に適合的な人々に対して、他方で国境に鍵をかけ、多少とも「閉ざされた社会」のモデルを推奨することで変化を免れるだろうと信じる人々との亀裂となって来ている。それは、1992年、マーストリヒト条約の承認に関する国民投票時のフランスで最初に現れ、選挙民をほぼ拮抗する二つの勢力に分断した。東ヨーロッパのEU加盟候補国を見ても同様の現象が観察される。極右の指導者は「閉ざされた社会」の不安感を利用するのに自分たちの党派がきわめて有利な位置にあることをよく知っている。FNにとって、フランス国民の中で「健全でない」唯一の部分は、コスモポリタンに侵食された「エスタブリッシュメント」であり、「エスタブリッシュメント」はすでに国民の外部に位置していること、ならびに「開かれた社会」、「閉ざされた社会」などについては、ペリノー教授は1998年の日本における講演でもすでに明らかにしている（参照、パスカル・ペリノー、中山洋平訳「講演 新たな選挙力学の研究—国民戦線（FN）、1984-98年」『国家学会雑誌』第112巻第7・8号）。

ペリノー教授によれば、国家の強い規制の下で、産業資本主義は均質な階級社会を作り出していた。それは社会的ミリュー、イデオロギー、政治グループへの永続的帰属感を生み出していた。しかし、このしっかりとした安堵感を再生産していた世界は死んだ。フランスの場合、左翼、右翼という二つの世界、一方は共産党周辺に形成され、他方はカトリック教会周辺に形成されたものだが、この二つの世界はともに消滅してしまい、巨大な喪失感が残った、と言う。

だが、ペリノー教授によれば、ヨーロッパにおける極右の上昇は避けられない現象ではない。あちこちでの極右や極左の復活は、現代政治の受け容れることの難しさへの「こだま」にすぎないからである。

読者は、シンポジウム当日の午前中に行なわれた関西大学法学部の学術講演会におけるペリノー教授の講演録「2004年EU議会選挙におけるヨーロッパ懐疑主義の伸長について」『関西大学法学論集』第55巻1号、296-308頁、も御併読いただければ幸いである。

最後に、末筆ながら、このようなシンポジウムならびに講演録の訳出にあたっては、中山洋平 東京大学大学院法学政治学研究科助教授、伊藤武 東京大学大学院法学政治学研究科COE特任講師に大変お世話になったことを記して感謝を捧げたい。